

## 黒い羊効果 (black sheep effect)

### —社会的アイデンティティへの脅威となる内集団成員への差別現象—

筑波大学大学院(博)心理学研究科 大石 千歳

筑波大学心理学系 吉田 富二雄

The 'black sheep effect': Discrimination against an ingroup member who threatens the social identity of the group

Chitose Oishi and Fujio Yoshida (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba, 305-8572, Japan*)

A phenomenon called the 'black sheep effect' is assumed to be behind the discrimination in everyday life, which becomes worse nowadays. The social identity theory or the self-categorization theory explains the black sheep effect as follows: The personal identity of group members partially comes from their own ingroup as 'social identity', and they are motivated to maintain their social identity as respectable. To maintain respectable social identity, they despise the deviants of their group and exclude them from their ingroup. In this paper, studies on the black sheep effect are reviewed from a group psychological aspect. In this review, social identity is raised as the key concept in explaining the black sheep effect. The problems of explaining the black sheep effect from schema complexity on ingroup and outgroup are also discussed. In addition, a new aspect of the black sheep effect is presented.

**Key words:** black sheep effect, ingroup, outgroup, social identity.

#### はじめに

近年、学校や職場等における様々な差別の問題が特に深刻化している。個々の事例の背景には、各事例に特有の様々な個別的要因が存在しているが、マクロな視点で差別というものの構造を考えると、そこには“仲間集団の一員でありながら集団に馴染めない者を、仲間とは認めず逸脱者として卑下し排除する傾向”があると考えられる。このような傾向は、集団心理学においては“黒い羊効果 (black sheep effect)”と呼ばれている。白い羊の群れに一匹だけ混ざっている黒い羊が、仲間とは認められずに排除されるという聖書の故事にちなんで、ポルトガルの Marques, Yzerbyt, & Leyens (1988) により命名された現象である。Marques らは、黒い羊効果

を内集団(自分が所属している集団)と外集団(よその集団)との比較場面において、内集団の優越性を確認し、内集団の評判を維持することによって、自己評価を高く保とうとする動機によって起こる現象と考えた (Marques, et al., 1988)。この現象の背景には、“人は所属集団の特徴から自らのアイデンティティの一部を得ている”という、Tajfel (1978) の社会的アイデンティティ (以下 SI) 理論が存在する。

ところが、集団心理学においては、内集団の成員であるという事実のみで、外集団成員よりも報酬を多く分配されたり、高く評価されたりする“内集団ひいき”現象の存在が古くから示されており (Tajfel, Billig, Bundy, & Flament, 1971)、内集団ひいきもまた、外集団と比較した場合の内集団の優越性を確

認し、内集団の評判を維持しようとする動機から起こると説明されてきたのである。すなわち、矛盾すると思われる2つの現象が、ともにSI理論によって説明されているのである。

本論文では、まず“社会的アイデンティティ”という概念およびSI理論に関する説明を行った上で、これまでの集団間差別研究において中心的に論じられてきた内集団ひいきと、この現象に矛盾しながらも、いじめ等の現実場面における現象に対する常識的見解と一致する、黒い羊効果に関する研究の流れを概観し、両現象の関連性を検討する。さらに、黒い羊効果研究の意義および今後の発展可能性を模索する。

### 1.1. “集団”の定義の変化と“内集団ひいき”現象

1960年代頃の集団研究初期においては、人々が集まって共通の目標を持ち、相互作用をしながらその目標を達成してゆく場合に、集団が成立しているとみなされた。成員どうしがお互いに対面的な相互作用を持つ小規模な集団のことを、小集団(small group)という。当時の集団心理学では、集団とはこの小集団に限定されていた。

ところが、内集団ひいきは、集団成員間に相互作用がない場合にも生じることが明らかになった。Tajfel, et al. (1971)は、面識のない人々をただランダムに「赤グループ」と「青グループ」などとして、集団としての特徴を一切持たないように、つまり集団としての条件を最小にした状態として形成された集団である「最小条件集団(minimal group)」を用いた実験を行った。小学生を被験者とし、ささいな基準で2つの集団に分けたと教示しながら実際にはランダムに2つの集団を構成した。そして、自分が割り当てられた集団ともうひとつの集団に属する匿名の人物に、分配マトリックスと呼ばれる方法で報酬の分配を行った。その結果、どの集団の成員であるかという以外には一切の情報を与えられなかったにも関わらず、自分と同じ集団の成員には報酬を多く分配し、他の集団の成員との間の報酬の格差を大きくしようとする現象が見られたのである。

このように、最小条件集団でも、内集団ひいきは生じたため、内集団ひいきは、集団全体および成員個人の目標を達成する動機よりも、集団の成員性そのものが引き起こす現象であると考えられるようになったのである。そこで登場した説明原理が、Tajfel(1978)のSI理論である。SI理論では、集団成員間に対面的な相互作用がない、大規模な集団である“社会集団”における様々な現象を説明する理論である。この理論においては、従来のsmall groupの

時代とは、“集団”の概念が全く異なっている。

Turner(1987)は、SI理論の立場における集団形成の3つの条件を提示している。それは、アイデンティティ(identity)、相互依存性(interdependence)、社会構造(social structure)の3つである。すなわち、ある特徴を持った人々の間で、その特徴が自らのアイデンティティとして自己概念の一部に取り込まれ、その特徴によって自己を認知し、定義するようになることが、その人々を集団と呼ぶための第一の条件である。SI理論における狭義の相互依存性とは、個人が他の人々との信念や価値観の一致を確認することにより、その信念や価値観を共有した者同士を一つのカテゴリーとして認識することである。このことと先の“アイデンティティ”の条件により、“ある特徴をアイデンティティとして共有し合っている人々の集まりが、集団と呼ばれる”という言い方ができる。社会構造とは、国家や民族、職業等の、社会における比較的安定的な役割体系に従った組織構造を指している。たとえば同じ同じ職業の人々においては、当該の職業の特徴が自己概念の一部に取り込まれやすく、同じ職業を持つ他の人々と自分を一つのカテゴリーとして認識し、集団として認知することになる。SI理論における“社会集団”とは、このような集団を指すのである。民族や職業等の例からも分かるように、社会集団では成員間の対面的相互作用は必ずしも必要ではない。そのため、社会集団における様々な現象を説明するには、“ある集団に所属しているという意識”のみが重要となってくるのである。

### 1.2. 社会的アイデンティティ理論

Tajfel(1978)は、Tajfel, et al. (1971)の結果から、個人がある集団に属しているという意識である集団成員性が、個人レベルでは起こり得ない、集団に特有の様々な現象を説明する鍵であると考えた。

人々に、「あなたはどんな人ですか」と尋ねると、「私はお菓子が好きです」あるいは「ピアノ演奏が得意です」といった、全く個人的な趣味や好みによって自分を定義する場合の他に、「私は〇〇会社の社員です」あるいは「私は美容師です」などのように、所属する職業集団によって自分を定義する場合が少なくない。また、「私は日本人です」あるいは「私は黒人です」などといった、国家や人種、民族等のカテゴリー分けによる自己定義もしばしば行われる。このように、人は自らがどんな人間であるか、すなわち自らのアイデンティティを定義するときには、全く個人的な特徴の他に、所属する社会集団の特徴を用いることが多い。そして前者は個人的アイデンティティ、後者は社会的アイデンティ

ティ(SI)と呼ばれる。

Tajfel(1978)は、第二次世界大戦時のヨーロッパの様子を見て、人種や民族といった社会集団の成員性が、個々人にとっていかに重要な意味を持っているかを痛感し、「人は所属集団の特徴を“社会的アイデンティティ”として自己概念の一部に取り込んでいる」という着想を得た。そして、集団同士が対立関係になると、人は自らの所属集団の優越性を維持し、所属集団から得るSIを高揚することにより、自己概念の優越性や安定性を保とうとすることや、そのために用いる方略として、後述の社会移動、社会的競争、社会的創造のどれかの方略を用いることなどを仮定したのである。

まとめると、SI理論は、以下の3つの理論的仮定により構成されている。

1. 人は、自分の所属する集団からアイデンティティの一部を引き出している。それがSIである。
2. 人は、自らのSIを維持、高揚しようとする動機に従って行動する。
3. 人は、現在の所属集団から得るSIに満足できない場合、社会移動(所属集団を替える)、社会的競争(他の集団と競争し、他の集団を差別することなどによって、自集団の優越性を保つこと)、社会的創造(これまでとは違った次元で他の集団との比較をすることによって、自集団が優位になるようにすること)の3つの方略のどれかを用いて、自分のSIを満足なものにしようとする。

今日の集団研究においては、成員間に対面的相互作用のない、国家や人種、職種などに代表される社会的カテゴリーとしての大規模な集団(これを社会集団(social group)という)を研究対象とすることが多い。小集団の研究では、成員間の対人魅力やソシオメトリックな選択関係等が重視され、集団間差別も小集団における集団凝集性との関連において論じられていた。しかし、大規模な社会集団においては、成員間に面識も対人的相互作用もないため、成員間の対人魅力やソシオメトリックな選択関係では、社会集団における集団間差別を説明することはできない。SI理論における、集団成員性のみによっても集団間差別が起こるとする見解によって初めて、社会集団における集団間差別の説明が可能になるのである。

最小条件集団において内集団ひいきが起こるのは、たとえ些細な基準で分けられた集団であっても、ある集団の成員であることが、SIの源泉となりうるためである。人々がある集団を形成すると、

他の集団との間に実際以上の差異が知覚され(Tajfel & Wilkes, 1963)、内集団成員と外集団成員は異なる存在として認知される。これをカテゴリー差異化過程と呼ぶ。また、Festinger(1954)の社会的比較過程理論によれば、自己の評価は他者との比較によって形成される。内集団から得るSIは自己概念の一部である。人には自己概念をポジティブに保とうとする動機があり、外集団との比較において内集団の優越性が示される必要が出てくる。これをカテゴリー間比較過程という。そのため、内集団の成員であるという事実がひいきを起す原因となりうるのである。

ところが、近年この内集団ひいきと矛盾するかに見える「黒い羊効果」という現象が報告された(Marques, et al. 1988)。

### 2.1. 黒い羊効果と社会的アイデンティティ理論

Marques, et al. (1988)によれば、黒い羊効果とは、“内集団と外集団の同じ程度に優れた、もしくは劣った成員を比較する場合、内集団の優れた成員はより高く、内集団の劣った成員はより低く評価される現象”であるとされている。先述の内集団ひいきでは、優れているか劣っているかは問わず、内集団の成員であるという事実がひいきを起こさせるとされているので、内集団ひいきが生じる場合には、劣った内集団成員は劣った外集団成員よりも高く評価されることになる(Figure 1)。すなわち、劣った内集団成員への評価をめぐって、黒い羊効果と内集団ひいきとの間に矛盾が起こるのである。

Marques, et al. (1988)は、黒い羊効果に関して、内集団ひいきの説明原理と同じ、SI理論による説明を提唱している。先述のように、個人は自ら

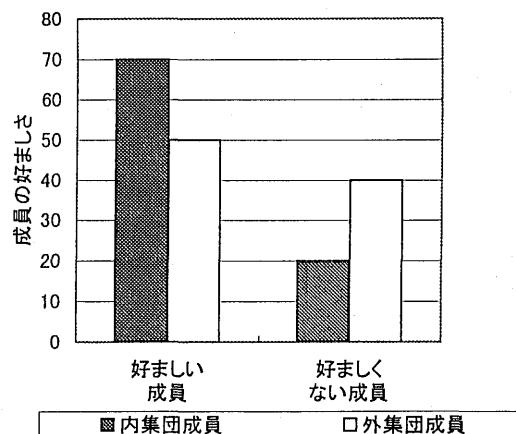


Fig. 1 黒い羊効果の模式図

の所属集団からアイデンティティの一部をSIとして得ているので、このSIを脅かす存在を排除しようとする。内集団に劣った成員がいると、集団全体の足を引っ張る存在として認知され、このような成員を排除しようとする動機が発生すると考えられる。そのため、劣った成員は、低く評価されて切り捨てられるのである。

この研究では、ベルギー人大学生を被験者として3つの実験を行い、黒い羊効果の発生を確認している。実験1では、ベルギー人大学生(内集団成員)と北アフリカ人大学生(外集団成員)の、好ましい者と好ましくない者の4種類の評定対象のうち1種類について、典型的な人物を一人イメージさせて、その人物の好ましさを38個の形容詞による尺度上で評定させた。その結果、好ましいベルギー人大学生は好ましい北アフリカ人大学生よりも高く評価され、好ましくないベルギー人大学生は好ましくない北アフリカ人大学生よりも低く評価され、黒い羊効果の発生が示された。

SI理論によるこの解釈は、日常生活上の集団での人間関係についての常識的な理解とよく合致し、その妥当性は高いと考えられる。しかしMarquesらは、SI理論以外にも、黒い羊効果を説明する原理が存在している可能性を考えて、以下の2つの説の妥当性に関しても検討を行っている。

## 2.2. 黒い羊効果に関する他の説明原理

Marques, et al. (1988)では、内集団成員および外集団成員に関するスキーマの複雑性の違いに立脚した、Linville(1982)の複雑性-極端性仮説(complexity-extremity hypothesis)とMillar & Tesser(1986)の態度の極性化説を取り上げた。

複雑性-極端性仮説とは、ある事例に関するスキーマの構造が複雑である場合には、スキーマ内部に相互に独立の属性を含み、それらが相殺しあうため、当該の事例に関する評価は中庸になるという説である。被験者にとって内集団は、自らの所属している集団であるため、他の内集団成員との接触頻度が高くなり、他の成員に関しての情報が入手しやすく、スキーマの構造は複雑になると考えられる。これに対して外集団については、内集団成員についてよりも情報収集がしにくく、スキーマはより単純な構造になると考えられる。そのため、内集団成員に関する評価が中庸化する、すなわち、外集団成員のほうが、好ましい場合にも好ましくない場合にもより極端な評価を受けると仮定される。つまり、複雑性-極端性仮説が正しければ、黒い羊効果と逆の現象の発生が予測されるのである。

Millar & Tesser(1986)の態度の極性化説は、複

雑性-極端性仮説と同様に、内集団成員と外集団成員に関するスキーマの複雑性の違いに立脚しているが、複雑性-極端性仮説とは逆の結果を予測するものである。内集団成員のほうが接触の機会が多いため、多くの情報が取り込まれてスキーマが複雑になるという点については、複雑性-極端性仮説と同じ見解を採っているが、この説においては複雑なスキーマは極端な評価を生み出すとされている。なぜなら、複雑なスキーマには、複雑でないスキーマと比較して、極端に好ましい事例情報から極端に好ましくない事例情報までが含まれていると考えられるからである。Marques, et al. (1988)の実験1のデザインだけからでは、これらの2説およびSI理論の計3つの説明原理のうち、どれが最も妥当なのかを判断することはできない。そのためMarques, et al. (1988)の研究3では、以下の実験が行われた。複雑性-極端性仮説および態度の極性化説は、ともに内集団成員と外集団成員への評価の違いの原因を、内集団成員および外集団成員に関するスキーマの構造の複雑さの違いに求めるものであった。これに対しSI理論による解釈では、両集団のスキーマの構造や複雑性を問題とはしない。また、SI理論と態度の極性化理論では、被験者の内集団に対するコミットメントの程度を問題とするが、複雑性-極端性仮説はこの要因を取り上げていない。3説の間のこのような差異を用いた実験デザインによって、最も妥当性の高い説明原理がどれであるかを検討したのである。

Marques, et al. (1988)の研究3は、ベルギーのブリュッセルのサッカー場で起こった、39人が死亡し4時間に亘り全ヨーロッパでTV中継された、イタリア人とイギリス人の観客同士の大暴動である「ヘーゼルの暴動」事件を題材にして行われた。この事件の2日後に、ベルギー人大学生を被験者として、“サッカーと暴力”という質問紙を配布した。この質問紙では、ベルギー人(内集団成員)とドイツ人(外集団成員)のサッカーファンが同様の暴動を起こした場合を想定して、各被験者に、ベルギー人もしくはドイツ人のフーリガン(暴徒的サッカーファン)をイメージさせ、26個の特性記述語を用いた評定を行わせた。すなわちこの実験では、好ましくない内集団成員が卑下されることを確かめる点のみに焦点が当てられていた。またこの際、被験者のサッカーへの親しみ(familiarity)を尋ねる項目5つを尋ね、その得点の高低により被験者を2群に分けた。サッカーへの親しみの程度が高いということは、サッカーファンに対する知識すなわち事例情報を多く持ち、サッカーファンに関するスキーマが複雑で

あることを示す。態度の極性化説に従うと、サッカーへの親しみが高い被験者は、そうでない被験者と比較して、ターゲット人物の評価次元(望ましいサッカーファンであるか否か)に関して詳細な情報処理を行い、サッカーファンへのスキーマの構造が複雑化すると仮定される。またこの傾向は、自らがコミットしている内集団において顕著であると考えられる。そのため、態度の極性化説の立場からは、サッカーへの親しみが高い条件においてのみ、内集団成員が外集団成員よりも低く評価されることになる。しかし、ベルギー人フーリガンはサッカーへの親しみの程度に関わりなく、ドイツ人フーリガンよりも低い評価を受けた。このため、評価次元に関する親しみの高さによるスキーマの複雑性から黒い羊効果を説明することは、適切でないことが示された。ヘーゼルの暴動により内集団のSIを意識したことが黒い羊効果を発生させたと考えられ、SI理論による解釈が妥当であることが示されたのである。

また、Branscombe, Wann, Noel, & Coleman (1993)は、複雑性一極端性仮説と態度の極性化理論およびSI理論の3者の関連を示唆する興味深い研究を行っている。この研究では、これらの3説を排他的な説明原理とは考えず、内集団へのコミットメントが高い場合にはSI理論による説明が成り立ち、コミットメントが低い場合には複雑性一極端性仮説に従った説明が成り立つと仮定した。この研究では、カンザス大学学生を被験者とし、カンザス大学とオクラホマ大学バスケットボールチームの試合に関する記事を書いたカンザス大学学生新聞の記者に関する評定を行った。記事の内容には、SIが低められる脅威の有無に対応し、カンザス大学が試合に勝った場合と負けた場合とがあった。記者にはカンザス出身者(内集団成員)とオクラホマ出身者(外集団成員)があり、また記者にはカンザス大学バスケットボールチームの熱心なファン(規範に同調)と不熱心なファン(規範から逸脱)とがいた。内集団への同一化(identification)の高い被験者においてのみ、黒い羊効果の発生が仮定された。すなわち、内集団の規範に一致した者はより高く、逸脱した者はより低く評価されると考えられた。同一化が低い被験者においては、複雑性一極端性仮説に従い、外集団成員のほうがより極端な評価を受けると仮定された。上記の実験の結果、同一化高群では、内集団の規範に逸脱した内集団成員が低く評価された。つまりカンザス出身の記者は熱心なファンであればより高く、不熱心なファンであればより低く評価された。また、SIへの脅威がある場合とない場合とを

比較すると、前者において熱心なファンと不熱心なファンへの評価に関する前述の方向性がさらに極端になることが示された。同一化低群では、複雑性一極端性仮説に従い、外集団成員のほうが、熱心なファンであればより高く、不熱心なファンならばより低く評価された。しかし上記の実験デザインでは、内集団への同一化高群では内集団に関して詳細な情報処理が行われてスキーマが複雑になり、成員への評価が極端になったと説明することもできる。その場合にはSI理論ではなく、むしろ態度の極性化説による説明が妥当である可能性が強くなる。そのため、Branscombe, et al.(1993)からは、同一化高群の結果の解釈において、SI理論と内外集団のスキーマの複雑性に依拠した説明原理のどちらが妥当かは明らかにされなかったと言える。

さらに、内集団へのコミットメントの影響については、日本において杉本・本間・船山(1996)が検討を行っている。大学生女子を被験者とし、大学生の就職活動における面接場面と称して、ビデオ映像によって面接を受けている女子学生をターゲット人物として提示され、その望ましさを11個の項目により評定した。被験者には心理学科と現代社会学科の学生があり、ターゲット人物も、これに対応して心理学科と現代社会学科の、望ましい人物と望ましくない人物が提示された。実験デザインは、一人の被験者が内集団と外集団の、望ましい人物と望ましくない人物の全てを提示される被験者内計画であった。被験者の内集団へのコミットメントの度合いは、ターゲット人物の評定の2週間後に、15項目7件法によって測定された。内集団の好ましい人物はより高く、好ましくない人物はより低く評価されると仮定された。また、内集団へのコミットメントが高い被験者のほうが黒い羊効果がより顕著に示されることが仮定された。現代社会学科の被験者においてのみ、好ましい内集団成員はより高く、好ましくない内集団成員はより低く評価され、仮説が部分的に支持された。この際、内集団成員への評価は内集団へのコミットメントの高低とは関連が見られなかった。従って、内集団へのコミットメントの影響については、今後さらに検討を行っていく必要があると言える。

### 2.3. 黒い羊効果と自己カテゴリー化理論

ところで、Marques & Paez(1994)では、Marques, et al. (1988)の研究2を、SI理論に近年めざましい発展を遂げた社会的認知研究および自己に関する研究の視点を導入し発展させた、Turner(1982)の自己カテゴリー化(self-categorization: 以下SC)理論を用いて黒い羊効果を説明しようとする試みとして

位置づけている。

SC理論とは、自己概念を構成する個人のアイデンティティが、個人的アイデンティティ(personal identity)とSIから成り、Figure 2に見られるように、両者は“アイデンティティの連続体”と呼ばれる一本の連続体をなしているという基本的仮定の上に成り立っている。個人が置かれた状況が所属集団を強調するものであるかそうでないかにより、アイデンティティの連続体上におけるSIと個人的アイデンティティの割合が変わり、自己を所属集団の一員として定義するか、全くの自由な個人として定義するかが異なってくる。SIの割合が増大し、自己を内集団成員として定義した場合には、自己を含む内集団成員は、すべて“内集団成員である”という定義次元のもとに一律に定義され、内集団の特徴的あるいはプロトタイプの次元に従ってすべて同質で交替可能であると認知される。これを、内集団成員の脱個人化(depersonalization)現象という。すなわち脱個人化が起こると、内集団同質性認知が発生するのである。また、自己概念においてSIの割合が増大するという事は、内集団への評価が自己への評価に直結することを意味しており、個々の成員は内集団に対する評価を高く保とうとする。そのため、内集団の成員であれば誰でも高く評価する内集団ひいきなどの、自己が個人として定義されていた場合には起こり得なかった、集団に特有の現象が発生することになると考えられている。黒い羊効果も、内集団への評価を高く保ち、内集団のSIを維持・高揚する動機から、逸脱した成員を切り捨てる現象として、SC理論により説明できる。

SC理論はSIから派生したものであり、両者は類似している点が多い。しかし黒い羊効果に関しては、白い羊すなわち同質性の高い多くの内集団成員の中に一匹だけ混ざっている黒い羊が、その同質性を乱す者として排除される様を、脱個人化や内集団同質性認知の発生というメカニズムを仮定しているSC理論を用いるほうが、さらに詳細に検討できる(Figure 3)。

Marques, et al. (1988)の実験2では、ベルギー

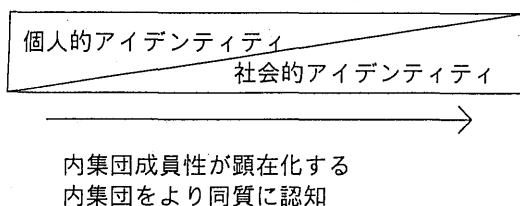


Fig. 2 SC理論におけるアイデンティティの連続体

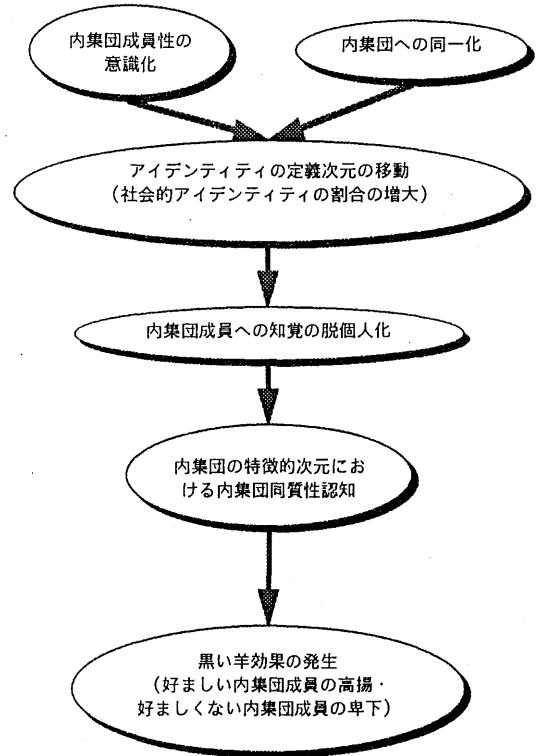


Fig. 3 SC理論による黒い羊効果の説明原理

人大学生(内集団)のみにあてはまる規範(勉強よりも遊びを優先する学生のほうが好ましい:以下 exclusive norm 条件)と、大学生全体にあてはまる規範(遊びよりも勉強を優先させる大学生のほうが好ましい:以下 general norm 条件)という2種類の規範を導入した。この2種類の規範のそれぞれについて、規範にあてはまるベルギー人大学生および北アフリカ人の、計8種類の評定対象のうちいずれか1つを提示され、その好ましさを5個の形容詞を用いて評定した。その結果、exclusive norm 条件でのみ、規範に一致したベルギー人大学生はより高く、規範から逸脱したベルギー人大学生はより低く評価され、黒い羊効果の発生が見られた。general norm 条件ではこのような結果は見られなかった。このことは、被験者が現在内集団成員性を顕在化されている条件においてのみ黒い羊効果が発生することを示している。なぜなら、ベルギー人大学生も“大学生”であることには違わず、大学生と他の職業集団等の比較の文脈が提示されていれば、この実験で general norm 条件の規範として用いた規範に関しても、黒い羊効果が発生したと考えられるためである。このことにより、現在内集団成員性が顕在化さ

れ、自己概念中のSIの源泉として機能している集団において黒い羊効果が生じたことが示され、SC理論による説明の妥当性が示されたといえる。

ところで、Marques, et al. (1988)の3つの実験により、黒い羊効果の発生が確認され、およびその原因が内集団のSIを維持・高揚する動機による可能性が示唆された。しかしこの研究においては、実験が完全な被験者間計画で行われ、各被験者は内集団成員か外集団成員のどちらか一方しか評定していなかった。そのため、各被験者の認知において、内集団成員と外集団成員が比較されて評定されたわけではなかった。このため、好ましくない内集団成員への評価が低かったことが、外集団成員との比較の分脈の産物であるとは言い切れない可能性があった。そこで、Marques & Yzerbyt(1988)の研究が行われた。この研究では、各被験者に内集団成員と外集団成員の両方を被験者内要因で提示し、真に内外集団の比較において黒い羊効果が起こることを確認した。

実験はベルギーのLouvain大学の法学科学生を被験者とし、法学科と哲学科の学生の演説であると称された録音テープを提示され、学生の演説能力を7つの項目により評定した。ターゲット人物は、法学科もしくは哲学科の、上手な演説者と下手な演説者の計4人であった。研究1では、上手な演説者群と下手な演説者群とを設定し、双方において法学科(内集団)と哲学科(外集団)の学生の演説の能力を評定させた。その結果、内集団の上手な演説者はより高く、下手な演説者はより低く評価され、黒い羊効果の発生が確認された。研究2では、内集団成員のみ2人提示される群と、外集団成員のみ2人提示される群とを設けた。この場合にも、内集団の優れた成員はより高く、劣った成員はより低く評価され、黒い羊効果の発生が確かめられた。研究1と2の違いは、内外集団の比較の文脈の違いである。研究1では同じ被験者に内外集団成員の両方を提示しているが、研究2ではどちらかの集団成員のみの提示である。研究2を行ったのは、Marques, et al. (1988)において完全な被験者間計画で行われた実験により黒い羊効果が発生したことと、研究1における内外集団成員の比較の文脈がある場合とにおける結果が、同じSI理論およびSC理論によって説明できることを示すためであった。この目的は達せられたが、研究1においては優れた成員と劣った成員の比較が行われていないことが、さらなる問題点として残された。すなわち、SI理論およびSC理論による仮説を検証するためには、内集団および外集団の、優れた成員と劣った成員のすべてを被験者内計画で

提示する実験を行うことが必要である。

#### 2.4. 黒い羊効果と集団同質性との関連

これまでは、黒い羊効果と、同様にSI理論により説明される現象である内集団ひいきとの関連を述べてきた。これに加えて黒い羊効果は、集団同質性認知との関連も密接に持っている現象である。

集団同質性認知とは、ある集団がみな同質な成員から成っていると認知することであり、内集団同質性認知と外集団同質性認知という2つの現象の存在が知られている。内集団同質性認知とは、先述のSC理論に基づき、内集団成員性が意識されることにより、自己を含む内集団成員の認知が脱個人化し、内集団のプロトタイプに収束する形で同質に認知されることを指している。外集団同質性認知とは、内集団成員に対しては外集団成員よりも接触の機会が多いため、個々の事例的情報が入手しやすいとの観点に立ち、情報の少ない外集団成員に対してはステレオタイプの認知が働き、同質に認知されるといわれることを指している。

内集団同質性認知と外集団同質性認知の間には、黒い羊効果におけるスキーマの構造に基づく説明とSC理論に基づく説明の対立構造に似た関係がある。この対立に沿って、黒い羊効果を内集団同質性認知と解釈するか外集団同質性認知と解釈するかで、見解の相違が発生すると考えられる。すなわち、黒い羊効果を内集団同質性認知からはみ出した逸脱者が切り捨てられる現象と捉えるのか、内集団には高く高揚されて認知される成員から貶められる成員まで幅広くいると考えて、外集団のほうが相対的に同質となると考えるかという問題である。

Doosje, Ellemers, & Spears(1995)は、Marques, et al. (1988)やMarques & Paez(1994)における黒い羊効果を、“内集団のSIが脅かされた時、SIを肯定的に維持するために、内集団成員の同質性を確保するべく、逸脱者を切り捨てるアイデンティティ管理方略”と位置づけ、“homogeneityを維持するためのheterogeneity”であるとして、heterogeneity strategyと呼んでいる。この主張は、Simon(1992)による、SIが顕在化された状況では外集団同質性認知ではなく内集団同質性認知が発生するとした、SIの立場による知見に基づいている。Doosje, et al. (1995)の研究1では、地位の高い集団(SIへの脅威はない)と低い集団(SIへの脅威がある)の成員を被験者として、低地位集団の成員であり内集団への同一化が高い場合に、内集団の同質性を最も高く認知するという仮説の検証を行った。その結果、低地位群においてのみ、内集団への同一化が高いほど内集団を同質に認知していることが示され、仮説が立証

された。この研究では、黒い羊効果を直接検討したわけではないが、内集団同質性認知は内集団のSIを高揚するための方略として用いられることが示されており、黒い羊効果に関する自己カテゴリー化理論による解釈の傍証的位置づけができる研究である。

### 3.1. 黒い羊効果と現実社会における現象との関連—特定の外集団との比較がない場合における黒い羊効果

ここで、現実社会における現象に対する説明原理としての黒い羊効果の役割について考えてみたい。

冒頭において述べたように、黒い羊効果は、様々な社会組織における差別の問題の根底に存在している現象と考えられる。学級集団を例にとれば、運動会等の行事等で学級単位の競争が行われるような場合、学級に特に足の遅い子などがいると、学級の成績を低くし、リレー等で足を引っ張る存在となる。このような子は、仲間とは見なされずに卑下され、排除されがちである。運動会における学級の競争が教師によって奨励され、勝つことによる褒美と負けることによる罰が大きくなるほど、このような傾向が強くなることは想像に難くない。また、同じ程度に足の遅い子がほかの学級にいても、自分の学級にとって迷惑な存在ではないため、ひどく卑下されることはないと考えられる。

しかし、ここで黒い羊効果に関して興味深い示唆をもたらすもう一つの例について考えてみたい。それは、弁護士集団における悪徳弁護士に対する評価についてである。悪徳弁護士による詐欺事件等がマスコミで大きく報道されるような場合、同じ弁護士という職にある者にとっては、“弁護士にはあれほどのトラブルを起こす者もあり、これからは弁護士といえども信用できない”といった意見が一般の人々に浸透してゆくことに対する警戒感が高くなり、当該の弁護士を極めて低く評価し、自分自身や他の弁護士と区別しようとするが推察される。このような現象も、黒い羊効果と呼べると考えられる。

ところが、この弁護士の例では、弁護士と比較・競争関係にある外集団が存在しない。学級の例では、運動会における他の学級が、明確な外集団として存在していた。しかし、この弁護士の例のように、明確な外集団が存在しなくても、逸脱した内集団成員によって内集団のSIが傷つけられる恐れがある場合には、当該の内集団成員を内集団から排除しようとする、黒い羊効果と呼べる現象が発生するのではないかと考えられる。この視点は、これまでになかった新しい観点である。

先述のように、内集団が成員のSIの源泉になっ

ていて、SIが成員のアイデンティティ全体において高い割合を占める状態になっていることが、黒い羊効果発生の原因となっていた。そして外集団の存在およびそれとの競争状態は、これらの条件が満たされる状況を作り出す働きを持っていると考えられた。それならば、これらの状況が外集団の存在以外の手段によって満たされた場合においても、同様に黒い羊効果は発生すると考えられる。例えば、先の弁護士の例に従えば、弁護士を被験者として、過去に弁護士が犯した犯罪についての新聞記事等を提示し、弁護士に対する世間一般からの信頼の低下を訴えれば、弁護士としての社会的アイデンティティに脅威を与えることができると考えられる。このような状況で黒い羊効果の発生を検討してゆく研究が必要といえる。

## 要約

最近深刻化している様々な差別の根底には、集団内での逸脱者が他の成員に仲間と認められずに排除される現象である“黒い羊効果”の存在が仮定される。黒い羊効果については、集団成員が所属集団から得るSIを高揚し、ひいては自己評価をポジティブに保つ動機により起こるという、SI理論およびSC理論に従った見解が主流となってきている。本研究では、集団心理学における黒い羊効果研究の流れを概観し、この現象においてSIという概念が鍵となるにいたった経緯や、集団成員に関するスキーマの構造から黒い羊効果を説明する立場の問題点について議論した。また、同じくSI高揚の動機により起こるとされるものの、黒い羊効果と反対の現象を引き起こす“内集団ひいき”現象との関連の検討を行い、集団内での成員の高揚と差別に関する研究を総括した。さらに、黒い羊効果研究の新しい方向性が論じられた。

## 引用文献

- Branscombe, N.R., Wann, D.L., Noel, J.G., & Coleman, J. 1993 In-group or out-group extremity: Importance of the threatened social identity. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **19**, 381-388.
- Doosje, B., Ellemers, N., & Spears, R. 1995 Perceived intragroup variability as a function of group status and identification. *Journal of Experimental Social Psychology*, **31**, 410-436.
- Festinger, L. 1954 A theory of social comparison processes. *Human Relations*, **7**, 117-140.



- Linville,P.W. 1982 The complexity-extremity effect and age-based stereotyping. *Journal of Personality and Social Psychology*, **42**, 193-211.
- Marques,J.M.,& Paez,D. 1994 The 'black sheep effect': Social categorization, rejection of ingroup deviates,and perception of group variability. In W.Stroebe & M.Hewstone(Eds), *European Review of Social Psychology*, Vol. 5. Chichester:John Wiley and Sons. Pp 37-68.
- Marques,J.M.,& Yzerbyt,V.Y. 1988 The black sheep effect:Judgmental extremity towards ingroup members in inter- and intra-group situations. *European Journal of Social Psychology*, **18**, 287-292.
- Marques,J.M.,Yzerbyt,V.Y., & Leyens,J.P. 1988 The 'black sheep' effect: extremity of judgements towards in- group members as a function of group identification. *European Journal of Social Psychology*, **18**, 1-16.
- Millar,M.G.,& Tesser,A. 1986 Thought-induced attitude change:the effects of schema structure and commitment. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 259-269.
- Simon,B. 1992 The perception of ingroup and outgroup homogeneity: Reintroducing the intergroup context. In Stroebe,W., & Hewstone,M. (Eds) *European Review of social Psychology*, vol 3, 1-30. New York, Wiley.
- 杉本久美子・本間道子・船山 玲 1996 Social Identityの維持におけるブラックシープ効果 日本グループダイナミクス学会第44回大会発表論文集, 156-157.
- Tajfel,H.(Ed.) 1978 *Differentiation Between Social Groups*. London:Academic Press.
- Tajfel,H., & Wilkes,A.L. 1963 Classification and quantitative judgement. *British Journal of Psychology*, **54**, 101-114.
- Tajfel,H.,Billig,M.,Bundy,R.P.,& Flament,C. 1971 Social categorization and intergroup behaviour. *European Journal of Social Psychology*, **1**, 149-177.
- Turner,J.C. 1982 Towards a cognitive redefinition of the social group. In H.Tajfel(Ed.), *Social Identity and Intergroup Relations*. Cambridge: Cambridge University Press. Pp 15-36.
- Turner,J.C. 1987 Rediscovering the social group. In Turner,J.C., Hogg,M.A., Oakes,P.J., Reicher,S.D., & Wetherell,M.S. *Rediscovering the social group:A Self-Categorization Theory*. Oxford:Basil Blackwell. Pp 19-41.

—1997. 9. 30 受稿—